

The Future
of
Industrial
Societies

Clark Kerr

産業社会の
ゆくえ

収斂か拡散か

クラーク・カー 著

嘉治元郎 監訳

東京大学出版会



The Future
of
Industrial
Societies

✓ Clark Kerr —

産業社会の ゆくえ

収斂か拡散か

クラーク・カー 著
嘉治元郎 監訳

東京大学出版会

著 者

Clark Kerr クラーク・カー カリフォルニア大学産業関係研究所顧問

監訳者

嘉治元郎 かじもと お 東京大学教授

産業社会のゆくえ——収斂か拡散か

1984年5月30日 初 版

[検印魔印]

著 者 クラーク・カー

監訳者 嘉治 元郎

発行所 財団法人 東京大学出版会

代 表 者 田中 英夫

113 東京都文京区本郷7-3-1 東大構内

電話 (811) 8814・振替東京 6-59964

印刷所 株式会社三陽社

製本所 新栄社製本所

ISBN4-13-053041-0

53417

目次

はじめに	1
------	---

第一部 産業社会の運動諸法則	13
----------------	----

一 対立競合する六法則	17
-------------	----

(1) キリスト教産業主義による収斂(17)	
------------------------	--

(2) 共產主義による収斂(19)	
-------------------	--

(3) 資本主義による収斂(22)	
-------------------	--

(4) オプティマムによる収斂(24)	
---------------------	--

(5) プラグマティズムによる収斂(30)	
-----------------------	--

(6) 多元産業主義による収斂(33)	
---------------------	--

二 社会の中枢面における収斂	40
----------------	----

三 反論と疑問	43
---------	----

(1) マルクス主義者(43)	
-----------------	--

(2) 非マルクス主義者(45)

四 正しいのは誰か、誤っていたのは誰か……………50

五 要 約……………57

第二部 収斂と多様性継続の証拠……………61

一 産業主義諸システムの存続能力と目的達成能力……………70

二 産業社会の構成要素……………78

(1) 知識の内容(78)

(2) 生産資源の動員(80)

(3) 生産組織(87)

(4) 労働パターン(90)

(5) 生活様式(93)

(6) 経済報酬の配分形態(97)

(7) 経済構造(102)

(8) 政治構造(107)

(9) 信条のパターン(110)

三 統計比較調査の結果……………114

四	特殊状況について……………	118
---	---------------	-----

(1) イギリスの労働者階級(118)

(2) 日本の労資関係(121)

(3) 文化大革命期の中国(124)

五	要 約……………	127
---	----------	-----

第三部	産業社会の近い未来……………	131
-----	----------------	-----

——収斂と多様性継続の可能性

一	産業社会に作用している力……………	136
---	-------------------	-----

二	多面的・多角的収斂仮説の再検討……………	150
---	----------------------	-----

三	経済構造の変化はさらに続くか……………	156
---	---------------------	-----

四	政治構造の変化はさらに続くか……………	169
---	---------------------	-----

五	「脱革命」産業社会と「脱発展」産業社会……………	183
---	--------------------------	-----

六	歴史の新しい段階?……………	189
---	----------------	-----

七	変化する経済成長率……………	192
---	----------------	-----

八	新しいイデオロギーと新しい問題……………	208
---	----------------------	-----

九 収斂と多様性継続がもたらす結果	213
注	219
統計付録	251
精選文献解題	271
監訳者あとがき	275

はじめに

人間社会にはさまざまな形態がありますが、歴史的にはそれぞれの間に極端な違いが見られます。「人間ほど多様な条件下で生存している動物は他に類がなく、また人間ほど集団間での行動形態の違いが大きい動物もない」と言われています。⁽¹⁾これは、人間が地上に存在するようになって以来二百万年にわたって変わることのなかったルールであります。例えば、北米大陸や南米大陸のアメリカ・インディアンの経済活動、社会の仕組みは実に多様性に富み、それは人間の創意工夫や環境順応能力が無限に近いものであることを示唆しています。例えば、「カナダ北部荒地に住むインディアンの生活風習や生態は、大西洋沿岸地域インディアンのそれとは全く異なつたものとなり、また北アメリカ西南部砂漠地帯、カリブ諸島およびその他の広範な地域に住むインディアンのそれともすべての点で大きく異なつたものとなりました」⁽²⁾。生活風習や生態上のこうした相違は、今日でも遠隔地域間においては認められます。人間の生活圏は、地上のあらゆる

気候圏、あらゆる形態の資源存在地域にも及び、人間はいかなる生物よりも創造性のある環境順応能力を発揮しているのです。この優れた環境適応能力こそ、人間が地上を支配している重要な要素のひとつなのです。

人間生態に歴史的に見られる多様性は、人間が自然によって与えられたさまざまな環境を捨て、まず定住農業、次いで工芸および商業、そしてさらにには産業という形で自らの生活環境をつくりあげるようになるに従い、希薄になっていきました。人間は、大きな違いのあるさまざまな生活環境をいくつも創り続けることができたはずですが、しかし現実においては、限られた形態、特に近代においては産業生活形態というほとんど単一的な形態への集中を自主的に選択するか、あるいは何らかの事情によってそれを強制されるかに至っています。この結果、「比較的産業化の進んだ社会の間には、たとえばさまざまな違いがあるとしても、一般構造という点においては、産業化の比較的進んでいない社会間よりは、はるかに多くの共通点が見られる」ようになってい⁽³⁾ます。

これから検討する問題は、このような社会形態の収斂過程が、社会が産業化段階に到達した後においても継続するものであるのかどうか、ということでありま⁽⁴⁾す。産業社会は、さまざまな歴史環境、資源環境の中でそれぞれ異なった発展の仕方をしてきたことは明らかです。しかし、いったん産業化が達成されれば、その後はそれぞれの産業社会が社会構造や経済活動の面で同じよ

うになるという、収斂傾向が出てくるものなのでしょうか。そして産業社会は、普遍的な同化過程の中で、すべて似たような社会になってしまふものなのでありましようか。

いくつかの可能性が考えられます。そのひとつは、収斂が続くという可能性です。もうひとつの可能性は、収斂が進行するものの、産業社会は、文化、イデオロギー、指導者層などの点でそれぞれの独自性を多少なりとも維持しながらさまざまな方向——ときには平行線をたどりながら——へ発展していくだろう、ということでもあります。そしてさらにもうひとつは、いったん産業化が達成されれば、それぞれの社会は、あたかも宇宙が爆発してしまつたかの如くに、全く違った弾道を描いて進み、お互いの違いがますます大きくなる、という可能性です。これらの三つの可能性の中で、どれが最も有力なのでしょうか。

* 用語の定義——本論において私が使う「収斂」、「拡散」、「統一性」、「多様性」は、それぞれ次に示すような意味においてである。

「収斂」——各産業社会がその構造、発展過程および目的達成能力においてより類似性が強くなる傾向を意味する。

「拡散」——各産業社会がその構造、発展過程および目的達成能力において離反していく傾向を意味する。

「統一性」——各産業社会の構造、発展過程および目的達成能力が一樣な状態にあることを意味する。

「多様性」——各産業社会の構造、発展過程および目的達成能力にさまざまな変化が存在する状態を意味する。

「収斂」と「拡散」は、運動の方向について、「統一性」と「多様性」はある時点における状態について、それぞれ言及する表現である。もちろん、「収斂」「拡散」いずれの方向へ動くにしてもさまざまな速度の違いがあり、またいかなる時点における「統一性」と「多様性」にもさまざまな度合の違いがある。

一定の収斂が進むとした場合、それはどの程度までのものとなるのでしょうか。ヘルベルト・マルクーゼは、人間社会に存在してきた多様性や異質性は、彼の言う「単次元人間」——社会的に管理され同質化した人間、テクノロジー勝利の犠牲となった人間——の従順性の中で消滅しつつある、と主張しています。「現代産業社会」は、「経済技術の非テロ的調整作用とテロ的政治調整作用」の両者によって「全体主義的になる」、とマルクーゼは言っています⁽⁴⁾。しかし他の可能性もたくさんあります。社会のある部門における収斂がいかに徹底しても、あるいは逆にそれがいかに不完全であっても、そうした傾向は、社会の全領域に浸透することになるのか、あるいは特定領域にだけ、しかも異なる度合で浸透していくものなのでしょうか。そして後者の場合、浸透をまねがれる部門があるとすれば、それはどんな部門なのでしょうか。

収斂を推進、浸透させるのはどのような力なのでしょうか。収斂があるとすれば、それはどの

ような方向への運動なのでしょう。そして可能な多くの社会形態の中でどのような形態が支配的モデルとなるのでしょうか。あるいはモデルはひとつだけにかぎらず、複数のモデルが存在するのでしょうか。収斂過程は、どのような究極目的、あるいは中間目的に向かって進みつつあるのでしょうか。

産業社会発展の行方は、新しいタイプの社会が形成されつつあることが明白となつて以来、少なくとも過去一世紀半にわたつて予測や論議の対象となつてきました。しかし、現在広く使われるようになってゐる収斂⁽⁵⁾という言葉の起源は、比較的新しいものです。この言葉が特に表面化するようになったのは、一九六〇年頃で、まずジャン・ティンバーゲンの *The Optimum Regime* (5) の中ではじめて使われましたが、この著作とは全く無関係の研究であつた『産業主義と産業人 *Industrialism and Industrial Man*』の中でもほぼ同じ頃に使われています。後者はジョン・ダンロップ、フレデリック・ハーピソン、チャールズ・マイヤース、そして私の四人が共同執筆したものであります。⁽⁶⁾ 私たち四人の著作と同世代とも言えるティンバーゲンの本は、よりドラマティックであり、またより有名になりました。彼は、産業社会収斂の「最適」^{オプティム}点を設定していますが、これに対してわれわれの研究では、広い意味をもたせて定義づけた「多様性産業主義」の可能性の範囲を示すだけにとどめました。またティンバーゲンの場合には、収斂を全人類のためのより

よい社会の実現や世界平和実現の展望にまで結びつけているのに対し、われわれは、さまざまな形態の社会間における緊張が継続することを予測するにとどめ、国際間の緊張が緩和されるであろうというようなことまでは示唆しませんでした。われわれの研究には、ティンバーゲンの著作に見られるような劇的要素はありません。しかし、われわれの見解の方が、当時においてもまた現在においても、歴史的趨勢および将来の展望に関して、より現実在即したものである、と私は思います。

一九六〇年から現在に至る二〇年間に於いて、収斂に関する研究論文がたくさん発表されています（文献解題については巻末参照）。また、現在では収斂に関する統計資料も不十分ではあるがかなり改良されています。そして産業社会の行方をめぐる論議が再び盛んになっています。この問題に対する二〇年前の関心は、冷戦の一時的終結、社会主義国が市場経済メカニズムを、資本主義国が計画経済を、それぞれ部分的に導入するという当時の新しい傾向などを反映したものでした。そして現代における関心は、イギリス、アメリカ、ポーランド、中国などいくつかの国々において、経済発展の方向を再評価するための集中的努力がなされていることを反映しています。ソヴィエトは、最高指導部の世代交替が迫りつつある中で多くの国内問題、対外問題に直面しています。また収斂問題に対する現代の関心は、経済成長率が低下し、やがてそれは停止してマイ

ナスに転化するかもしれないという懸念、そして超大国間に冷戦が再開されたことなどを反映しています。したがって、収斂をめぐるいくつかの仮説を再検討し、これまで集積されている知識や情報を点検してみるのには、時宜にかなったことでありましょう。

収斂仮説を検討することは、産業社会の過去一世紀半にわたる経済的、社会的発展を分析するためのひとつのアプローチであり、またそれは、産業社会の近い将来の傾向を調べる方法のひとつでもあります。そしてさらには、開発途上国が将来どのようなコースをたどることになるかを想定し、その選択の可能性を求めるひとつの方法でもあるのです。

われわれが将来をどのように見、どのように考えるかということは、われわれの現在の行動に決定的な影響を与えます。歴史は、過去の遺産と併せて未来へのヴィジョンによって形成されることが、ますます強まりつつあるからです。われわれが自らの将来のためにどのような努力をするかは、われわれが未来に対してどのような希望、恐怖、期待を抱いているかによります。未来の展開に何を期待するか、未来の何に対して備えるべきか、未来においては何を避け何を变えるべきか、こうしたことがわれわれの現在の努力を規定することになります。T・S・エリオットの言葉を借りれば、「過去の時間と将来の時間は、ともに現在の時間に含まれている」のであります。

すでに産業化された国々、すなわち工業国に焦点をしばって議論を進めますが、ここでいう工業国とは、全労働人口に占める農業従事者の割合が二五パーセント以下で、国民一人当り所得が比較的高い水準にある国々、およびこれにほぼ相当する状態にあるいくつかの社会主義国であります。各工業国内部および工業国間にどのようなことが起こりつつあるのでしょうか。さらにこの問題とは別に、いま産業化されつつある国々は、すでに産業化された国々がたどった道と同じ道を必然的に歩むことになるのだろうか、という問題もあります。この問題については、これからの話の中で解答が部分的に示唆されることになるかもしれませんが、簡単にしか触れません。カール・マルクスは、「産業的により進んだ国は、産業化の遅れている国に対して、自らの将来像を投影するにすぎない」と言っています。⁽⁸⁾ この命題の問題点のひとつは、開発途上国の未来モデルが今日、ひとつではなく二つあるということです。ひとつは、社会主義国の管理経済システムであり、もうひとつは資本主義国の市場経済システムであります。しかもこの二つのモデルの変形が多く存在し、さらにそれぞれの中で絶えず変化が発生しつつあり、新しい別のモデルが出現するかもしれないのです。しかし、ベンジャミン・ウォードが指摘しているように、今日、多くの国々は近代化という「主要路線」にある、⁽⁹⁾ ということはできます。サイモン・クズネッツは、開発途上国と先進国との間には、政治、イデオロギーの面における収斂を含め、かなりの程

度の収斂が見られることを指摘しています。⁽¹⁰⁾ このような収斂は、さらに進行するかもしれません。しかし、ここでの私の主たる関心は、前述したような定義によるほぼ三〇カ国に達するすでに産業化された国々についてであります(表I参照)。現在、産業化過程にある多数の開発途上国が、どのモデルに従うことになるのかとか、あるいは自ら新しいモデルを創造することになるのかとかいう問題についてはありません。

私は、産業主義社会について、機械技術に大きく依存している社会、動物の力、水力および風力以外のエネルギー源に大きく依存している社会、相当な額に達する貯蓄および投資、高度な分業化、地上の大部分を網羅する通商活動などに大きく依存している社会の形態である、と定義づけています。これらの特徴をすべて合わせた場合、産業主義社会を他のいかなる経済形態の社会からも明確に区別することができます。そしてこうした特徴は、新技術の重視、生産および生産性の急上昇、農業から工業への大規模な雇用移動、人口の都市集中化、運輸通信手段の革命的变化、大企業の出現などの結果をもたらしています。私の産業主義の定義は、財産所有形態——産業社会ではさまざまな財産所有形態があり得ます——とは無関係なのです。財産所有形態は、産業社会を種分けするひとつの方法にすぎません。産業主義は、われわれの時代における一大現象なのであります。⁽¹¹⁾

表1 産業諸国

国名	1977年の1人当り GNP		1977年の1人当り GDP		1970年代後期における 就農人口比
	順位	1977年の米ドル	順位	1970年の米ドル	
スイス	1	\$ 11,080	12	\$ 3,664	16%
オーストリア	2	9,340	4	4,399	6
デンマーク	3	9,160	8	4,219	9
アメリカ	4	8,750	1	5,602	4
西ドイツ	5	8,620	3	4,434	6
ノルウェー	6	8,570	6	4,385	11
カナダ	7	8,350	2	4,949	5
ベルギー	8	8,280	5	4,391	3
オランダ	9	7,710	9	3,873	10
フランス	10	7,500	7	4,368	10
オーストリア	11	7,290	11	3,759	14
日本	12	6,510	10	3,788	11
オーストリア	13	6,450	16	3,259	18
ドイツ	14	6,190	13	3,481	17
東ドイツ	15	5,070	—	—	9
イギリス	16	4,540	14	3,447	3
ニュージーランド	17	4,480	15	3,288	13
チエコスロバキア	18	4,240	—	—	14
イスラエル	19	3,760	17	3,088	6